

# 花菖蒲に新しい動きを

## 会長 椎野昌宏

前会長の平尾秀一先生没後二〇年たち、先生の育成された格調の高い品種群は、協会主催の大船フラワーセンターの展示会に飾られ、参観者を魅了しています。先生が繰り返し言っておられた言葉を引用します。

「品種は自然植物そのものではなく人間が何らかの手を加えて育成したもので、つまり文化の産物です。品種は世の中の人びとの或る考えの下に活かされているものですし、神様の創造物というよりも人類の育成品であって、いわば人類の生活の伴侶であり道具である装飾品であるわけです。誰でも新品種を作出しみずから楽しみ世に広めるのはよいことですが、その全部を永久に保存することは不可能です。結局品種は社会の支持をえたものが生き延び、そうでないものは絶えるという運命のようです。日本花菖蒲協会は会員になるべく多くの品種を配布して、取捨では銘々にまかせるのが最良の途ではないでしょうか。そこに或るレベルが出来、それが文化だと思えます。」

私もまったく同感でして、現在でも多くの人々に愛培され、展示会の目玉である舞扇、水の光、碧涛、業平、白

玉楼などの平尾品種は先生の遺志どおり年月を経て文化レベルに達したものです。

つぎに植物の原種(野生種)について考えてみましょう。園芸は植物と人間とのかわりをいろいろな面から意識し追求するものである以上、地球環境の変動による生態の変化や都市化の進展による自生地の崩壊と消滅に注意をしなければならぬことは当然です。自然の植物は人類が物心つく前から地球上を生きてきたものですから、われわれ人類はその存在に敬意を表し、その生存を脅かさぬよう心すべきでしょう。しかしだからといって神聖冒すべからざるものとして、サングチュアリー化し、域外不出とすれば、このとり現象を招来すること確実です。無計画かつ恣意的な山採りはいけません、今こそ自生地の野生種を移出しその遺伝子を保存しなければなりません。私たちの協会でも花菖蒲という品格の高い園芸種を生んでくれたすばらしい親であるノハナシヨウブ (*Iris ensata*) に関心を持ち銘々が分担して自宅でも栽培しなければならぬと思います。このような認識をもって、清水弘理事長が起案し

て「花菖蒲品種特性分類表」を現在準備中です。従来の長井系、江戸系、肥後系、伊勢系、種間雑種系に加え、左記野生系統を加えます。

☆野生種 原野に自生するノハナシヨウブ及びその栽培種(自生地別に微妙な変異がみられる)  
☆野生変異種 自生地で採取された自然突然変異個体の株分け増殖品  
☆野生交雑種 野生種同士、または野生種と栽培種、栽培品種との交配に由来(園内実生、浸透交雑種を含む)  
これにより既に従来から普及し栽培されている野生種を整理し、今後新しい野生種の採取、分類に務めていきたいと思っております。いずれにしても従来の園芸種のみ分類から脱却して野生を含めた分類を基準としてその栽培にも関心を持つてもらい、失われんとしている遺伝子の保存に協力してもらおうことを願っています。田淵俊人玉川大学教授が中心となつて行われている全国ノハナシヨウブ自生地の調査とその野生種の保存・栽培活動はめざましい成果を挙げており、園芸学会でも報告され、高く評価されています。

最後に余談となりますが、私が関係していますベゴニアの世界から一つの例をあげてみましょう。葉模様が一ニクな欧米や日本で人気がある「ライア」という根茎性の原種です。記録によるとマレー半島東海岸のトレンガヌ州の山林で一八九二年に採取されシンガポール植物園で栽培され、二年後に英国に送られ、英国園芸協会の展示会で始めて飾られて注目を呼びました。その後、プラントハンターたちが同地域でライアの自生地を探しましたが見つかりません。百年たった今現在も19世紀末の始祖株から生まれた増殖株を連綿として栽培しているわけです。この貴重な遺伝子を保存するため学者たちはその栽培を広く呼びかけています。ベゴニアは熱帯、亜熱帯に分布しますが小地域固有種なるため、原種数も多く変化に富んでいます。ノハナシヨウブはかつて神奈川県にも自生していたようですが現在ではほとんど見当たりません。一年の協会の花菖蒲観賞旅行で見た、北海道、野付半島のノハナシヨウブが一斉開花した群落の圧巻は脳裏に残っています。乾燥による湿原退化現象が懸念さえているようであり、いつまであの景観が観賞できるか疑問です。人間の手で自然環境を整備できない以上、野生の原種株を植物園や一般に分散し栽培種として保存しなければならぬ時代に入っています。